

カンヌ国際映画祭公式の場 「CANNES GALA」とは

CANNES GALA は、フランスのカンヌで毎年5月に開催される「カンヌ国際映画祭」の期間中に行われる唯一の公式セレモニー。「誠実・高貴であれ」というテーマのもと、世界各国のリーダーや文化人が集い、次世代のコンテンツ産業（映画・音楽・芸術・ビジネスなど）の発展につなげることを目的としています。国や分野を越え、普段交わることのない特別な人々が意見を交わしあう、世界最高峰の社交の場です。

今年のカンヌ国際映画祭で日本が「開催名誉国」に選出されたことから、本セレモニーでも日本は大々的に取り上げられ、その文化が高く評価されました。



←世界的なアーティストや実業家が集う場

**伝統的で上質というだけで
存続できるとは限らない現実**

福智町出身の中山さんが「酒」の世界へ足を踏み入れる転機は、酒の席での会話の中にあつたといいます。「30歳でアメリカに駐在していた頃、成功を収めた各国の人たちと酒を酌み交わす機会がありました。皆が自国の酒文化を教養として深く語る中、私は日本酒のことを何一つ語れず、猛烈に恥をかきました。」

この経験から、自分と同じように日本酒の文化を日本人が知らないこ

とが少なくないのではないかと意識するようになったそうです。

帰国後、アマゾンジャパンに入社。食品飲料・酒類事業部を立ち上げ、全国の酒蔵を支援する中、その伝統の価値を知る一方で、衰退していく現実とのギャップに直面します。

「伝統を守り、自然の菌と共生して素晴らしい手仕事をしている酒蔵が、コンビニやスーパーの進出とともにどんどん潰れている。一方で、インターネットの先や海外には、そういう本物を熱心に探している人がいる。このギャップをどうにかした

かった。『1を100』にする仕事は散々やってきました。だからこそ、誰もやらない『ゼロから1』を、酒蔵の無い上野でやってみたかった。最初は『人が来るわけない』と言われました。でも、町が誘致事業を行うと知った時、使命感で体が動いていたんです。これはチャンスだと。やらずにはいられませんでした。」

**全力で走り続けた果てに
初めて省みた余白の時間**

天郷醸造所のブランド「在る宵」、

そして渦を巻くロゴマークには、中山さん自身の壮絶な挫折と、どん底からはい上がる時に得た哲学が込められています。

「若い頃は『自分には何も無い』という強迫観念から、いい企業、いいブランド、最先端の知識をと、必死に

『足し算、足し算』の人生を送っていました。本音に蓋をして戦い続けた結果、ついにメンタルが保てなくなりました。そこで初めて気づいたんです。支えてくれる人、家族、故郷の自然……。足りないものばかり探していたけれど、大切なものは最初からすべて自分の足元に在ったのだと。『在る宵』は、今そこにある幸せや周りへの感謝に気づくための、余白の時間に寄り添うお酒です。ただひっそりと、飲む人が自分を省みる時間に寄り添えればいい。そういうブランドなんです。」

同じ福智山の水と土から生まれた上野焼の器で、地元の素材を丸ごと醸した酒を飲む。これこそが、ヨーロッパでいう最高峰の「テロワール（風土の結晶）」であるとして、カンヌで注目を集めた天郷醸造所。これから酒単体に留まらず、素材や器など、さまざまな製品との結晶を世界へと広げていきます。

「無い物ばかり求める心から離れ、
“在る”ことへの感謝に盃を傾ける。
そんな宵の間に寄り添う酒です」

今年5月に、フランスのカンヌで開催された「カンヌ国際映画祭」の公認セレモニー「CANNES GALA」。

天郷醸造所 「在る宵 天郷—Amanosato—」

選り抜かれた招待者のみが参加できる特別な社交場で、天郷醸造所の「クラフトサケ」が振舞われました。



上野焼を添えた最上級モデル「在る宵・天郷」を手に「CANNES GALA (カンヌ ガラ)」のメインステージに立つ天郷醸造所社長の中山雄介さん。

これまでの歩みを凝縮

福智から世界へ 届けた一杯

2023年12月、町が公募した「クラフトサケ醸造所誘致事業」に名乗りを挙げ、発足した天郷醸造所。全国有数の酒蔵を抑え、なぜ新星の酒蔵が世界から見染められたのか。醸造所立ち上げからフランス「カンヌ」での披露へ至るまでの道のりに迫ります。

単なる完成度ではなく
文化的価値を問う場だった

「いきなり、ボンと電話がかかってきたんです。最初は『なぜうちなんだ』と実感が湧きませんでした。」

世界最高峰の社交場からの招待は唐突だったと社長の中山雄介さんは語ります。審査員であることを隠した要人が天郷醸造所のお酒を口に

し、白羽の矢を立てたのだそうです。「今年のカンヌの裏テーマは『AI時代における人間性とは何か』だったんです。数年のうちに多くの仕事は

AIに替わるかもしれない。そんな時代に、伸びるものと廃れるものの差はどこにあるのか。AIは課題を与えれば最短で答えを出しますが、できないこともある。それが人間の『つまりさ、挫折、悩み、歯を食いしばる泥臭さ』です。効率を極めた『文明』の対極にあるものが『文化』であり芸術。だから、すでに効率化されている大手の酒蔵ではダメだった。ゼロから立ち上がったうちの蔵の付まいそのものが、今の世界に必要なメッセージだったんです」とカンヌでの得難い瞬間を振り返りました。